

# かだりば通信 ～震災を生き抜いて～

8 2011

連絡先 〒113-0023 東京都文京区向丘1-7-8 電話 03-3830-5285 Email: office@risetogetherjp.org twitter: @risetogetherjp http://www.risetogetherjp.org/

## 震災後、新たに得た女たちのつながり

～「女の語り場 東日本大震災 vol.1」を仙台で開催して～

草野祐子



みやぎジョネットは、長期継続震災支援を念頭に立ち上げた団体です。被災者本人として、またそれまで1年半の個人的支援活動を経て、情報の重要性和小さなことの大切さ、そして視線を合わせ丁寧に関わりたいとして進めて参りました。

町ごとなくなる津波被害の凄まじさや被災したみなさんのお苦悩は、やはり実際に現地の泥濘や臭いの中に立ち、五感を通して知っていただきたいと思っています。「とにかく何でもいいから」せすにいら

れなかった女性の声を先ずは聞いてあげて欲しい。被災者と支援者の仲介役になりたいという思いから、語り場の構想は簡単に決まり膨らんでいきました。

準備を進める中、仙台では仕事が始まり行事が重なり、人的確保が難航しました。被災地との交通事情を考えると、一堂に会することは無理です。避難所では「ご自由にインターネットをお使いください」と貼りだされているものの、ロックがかかっていたり、電波が弱かったりと不都合もありました。何しろ水道が復旧していない、携帯が通じない、自家発電に頼っているといった状況下です。東京から応援を得て、仙台市から何度も現地へ通いました。

「語り場」功を奏し。当日は聞いてみなければ分からない事が色々

話されました。携帯メールをしたことのない女性は「iP」を知って驚いていました。女性視点の発言をみました。可能性が広がりました。一つの発言に対して多くの反響が寄せられ、素早い対応が必要になること、よく考えてから発言しなければならないことを再認識しました。顔が見える話し合いの意義が語られ、さらなる機会を望む声が上がりました。リハーサルなく当日を迎えましたが、登壇者の間で親交が深まり活動の潤滑油になりました。会場に変装を外した被災者もいます。

登壇者はみな、自分の町の人たちのことを胸に動いています。私たちはこうした女性の傍らにいて、失うばかりにせず、共に何か残せるものを作っていきたいと願い、今後も活動を続けていく予定です。

## 自分にできることを見つけたボランティア活動

7月24日、25日に東日本大震災の被災地に初めて行ってきました。24日は仙台で「女たちの語り場 東日本大震災Vol.1」に参加し、翌日ハーティ仙台のメンバー4名と石巻市の避難所に一緒に行きました。私はハンドマッサージを担当して、マッサージをしながら話をうかがう機会を持ちました。みなさん喜んでくださいましたが、印象として残ったのは食事を作ったり、おしゃれをしたり、自分自身のために時間を使ういっ

た日常がなくなっていることです。なかには、亡くなったご家族の話をしてくださった方もいらっしゃいました。

帰り道に沿岸部の状況を見た時には胸が締め付けられました。片付けがだいぶ進んだというもの、被害のすごさはテレビの画面を通して見る光景とは違うものでした。ここで暮らしていた方々、仕事をしてきた方々の全てがなくなり、変わってしまったことに衝撃を受けました。

東京では避難している方の相談ボランティアをしています。やはり日常生活がなくなっていることを感じます。いつになったら被災された方々は日常を取り戻せるのか、ここまで変わってしまった中での日常とは何なのか考えてしまいます。

本当に短い時間でしたが、自分にできること、するべきことは何なのかを今一度振り返って考える機会となりました。

(ボランティア参加者 H)



## 災害から立ち上がる 海苔販売店経営者姉妹



3月11日に南三陸を襲った大地震と津波で、千葉姉妹は全てを失ったが、命だけは助かった。60歳代の二人は、二世帯に渡って海藻販売店を運営するために借金を抱えていることを自嘲気味に話した。

「きれいな海辺の小町だった志津川の店は家と一緒に簡単に流されてしまったの。避難した高台から、ものすごく大きい津波にぜんぶ流されていくのを見ていました」ひろこさんは言った。

4ヶ月以上過ぎた7月24日、東日本大震災女性支援ネットワークとみやぎジョネットが協力して仙台市内のホテルで開催した「女たちの語り場」で、二人は海苔の販売を再開した。被災女性たちの話を共有し、支援のために集まった参加者の多くは、千葉姉妹が販売していたきれいに包装された海苔を手にし、陳列した商品は売り切れた。

その日の販売は上々。これを見て、ひろこさんとときみこさん姉妹

『かだりば通信』では、被災地で生活するみなさんからの記事、映像、川柳や短歌、詩などを募集しています。今後、応募された作品でコンテストなども開催予定です。作品は、東日本大震災女性支援ネットワーク・メディアチームまでお寄せください。

Email: office@risetogetherjp.org Fax: 03-3830-5285

は大きく安心し希望を持つことができた。あふれるような支援こそが、被災から立ち直るための一番の治療法だと言った。

「私たちにはまだ借金があるんです。借金を返していくには、商売を続けるしかない。今日連帯を感じたことによって、これからも続けていこうと強く思いました」とひろこさんは語った。

被災したほかの女性実業家も自家製味噌や卵、醤油などの商品を陳列していた。

この日は、農業に携わる女性たちが生活再建できるよう支援していくための大きな一歩になった。

## 国連女性差別撤廃委員会にNGOレポートを提出

今回の大震災では早くから避難所運営における男女共同参画視点の欠落が指摘されていた。これは未曾有の苦難に辛抱強く耐えている日本の被災者という、国際的に流通した被災者イメージの内実でもある。折から、国連女性差別撤廃委員会 (CEDAW)へ日本のフォローアップ項目に関して、政府・NGOともレポートを同委員会に提出する時期でもあった。

女性差別撤廃条約の加盟国は4年ごとに、条約の国内における実施状況の政府レポートをCEDAWに提出しなければなら

ない(第18条)。日本は2009年に第6次レポートを提出し、同年7月その審議がニューヨークの国連本部において開催された。NGOも種々のレポートを提出し、現地でも委員に対して活発なロビイング活動を行った。

2009年の審議結果としての同委員会の「総括所見」には、特に進捗状況が遅れている課題、「民法改正」(差別的な法規定)と各分野における「暫定的特別措置」について2年後までに実質的措置を取るようという厳しい結果であった。「暫定的特別措置」の中に、政治分野と共に「公的活動」(政府訳)がある。PTA、町内会などの地域活動、種々の職能団体活動、市民活動などを指す。当ネットワークはJNNC(日本女性差別撤廃条約NGOネットワーク)に加入し、他団体と共にレポートを提出した。レポートの趣旨は、

「公的活動」分野に災害時や復興時におけるジェンダー平等も含まれるという問題意識と共に、国際的人権基準導入の必要性も主張し、それを日本政府への勧告に反映させたいという趣旨である。なお、つい最近公表された政府レポートには大震災のことはひとつも触れられていない。審議は10月に行われる予定。

※レポートは東日本大震災女性支援ネットワークのホームページに掲載されています。

## チーム報告

## 支援チーム

みやぎジョネットの代表に上京していただいて、東京で学習会をしました。「お寺の避難所は、すごく雰囲気がかかった。お墓にね、洗濯物掛けたりしてた。湧水もあってとても助かった。」「物資もらうには、倉庫があるの。貸してくれた人がいたんですよ。」「避難してる人は、『何がほしい?』って聞くと、大丈夫ですって言う。生きて助かったし、ご飯も食べられてるからって。でも、『これは?』って聞くと、『ほしい』って言うの」

情景が目につくテンポのいい解説の間に、被災の中で亡くなっていった方々のことも語られる。みやぎジョネットが、今みんなに伝えたいことは「何しろ見に来て。4カ月経っても、まだ体育館みたいなどこにいるみんなを見に来てほしい」ということでした。

勉強会の後、参加者との話から、9月の初めには車を1台調達してボランティアに行くチームができました。運転手つきです。車ごと行って、支援団体のみなさんを少し休ませてあげられるといいな、と思うのです。ニュースレターをご購読のみなさん! 車と運転手つきで、どうぞボランティア派遣にご協力ください。

## 調査チーム

被災した女性の経験を聴く調査一フォトボイス(参加型アクション調査)は、オリエンテーションも含め3回のグループワーク(1クール)で実施します。福島では1クール終了し、参加者は情報発信することにしました。現在、参加者と共にその作業中です。宮城においても1クール終了しました。OXFAMの尽力でオリンパス(株)からカメラとICレコーダーなどの寄贈を受け感謝です。有効に使っていきます。

支援者に震災直後の救援やその後の支援活動の経験の聴き取り調査は、これまで岩手・宮城を中心に17人の方(地域リーダー、行政関係者、支援団体スタッフ、ボランティア)などさまざまな立場の女性に協力していただきました。現在分析中です。今後は地域的は福島にも、対象は男性支援者にも聴いていく予定です。

## メディアチーム

7月24日に開催する「女たちの語り場 東日本大震災 Vol.1」に先駆けて、仙台で記者会見をしました。被災地で女性たちが抱える特有の問題について、Skypeで女性たちが語り合う新しい試み。さぞや大きく報道されるとだろうと期待に胸を膨らませていましたが、結果、記者会見に集まったのは新聞社から2人、テレビ取材一件だけ。当日には、それより多くの報道陣が取材してくれたとはいえ、ほとんどが地域外の報道機関でした。被災地で、女性の権利、生活、意見などに目を向けてもらえるにはまだ時間がかかるようです。女性たちのこのつながりが少しずつでも広がり、仲間同士の支えによって励まされるよう、彼女たちと地道に活動を続けていくしかないと思っています。

## 研修チーム

7月23日に仙台市内で「災害支援の者のためのスキルアップ講座」を開催しました(国際協力NGOセンター JANICと共催)。参加者は約20人。半分以上が地元で活動する非営利団体の方たちで、あとは国際協力NGOやドナー団体などのスタッフでした。

はじめに「国際的な人道支援の基準にみるジェンダー・多様性配慮のポイント」について話し合いました。まずスフィアプロジェクトなどを紹介した上で、参加者にこれまでの支援活動でジェンダー・多様性における課題と、うまく対処できたことの2点を紙にそれぞれ書き出してもらいました。全体でお互い書いた内容を共有した後、課題解決を視野に入れてグループワークを行いました。

今後、幅広い参加者を対象にこうした研修を行う場合は、国内での災害や救援・支援事例から共有をはじめると、参加者によって資料や内容の構成を柔軟に変えたり、漫画や紙芝居など、絵を用いての理解が可能な教材の開発なども検討する必要があると考えています。



## いまこそ、女性の力が求められているとき

～南三陸町の下山うめよさんに聞く～



南三陸町出身の下山うめよさんにとって、記者会見で3月11日の恐ろしい出来事について自分の視点から話すということは、勇気と未来への強い思いがなければできないことだった。しかし、東日本大震災女性支援ネットワークとみやぎジョネットで組織された7月23日の記者会見は、地方の一女性にとって、人生の大きな転換点となったと下山さんは言う。

「メディアに話すことなんて初めてでしょ。自信がついたし、自分たちのために物事をどう変えていきたいか、被災した女性が伝えるいい機会だった」と下山さん。

地震が起きた時、巨大な津波に襲われた南三陸町の人々は高台に逃げ、巨大な波が街を丸ごと運び去るのを目撃したと、報道関係者に語りかけていた。幸運にも家族がその場にいなかったのも、下山さんは近所の子供たちと一緒に逃げた。木立の下で火が消えないように気をつけながら、町の人たちと薪をとり囲み、凍えながら夜を過ごした。

後には避難所での長い日々が待っていた。女性には、被災者のために何百人分もの賄い作業が割り当てられ、毎朝4時起きで米を炊き、皿を洗った。自分もまた被災者であり、家族や家を失った直後であることを考えれば、それは精神的にも肉体的にも疲弊させる過酷な仕事だった。

4ヶ月たっても、ほとんどの被災者は仮設住宅に移ることができず、なんとか生活の再建をしようと今も一所懸命だと言う。



下山さんは地元のリーダーとして選ばれたこともあり、みやぎジョネットの支援のもと、女性の声を聞き取る作業も始めている。それが自信となり、そしてこれからも女性たちの声を拾い続ける決意を持ちつつあるそうだ。

「高齢の被災者には、より手厚い援助が必要だと思う。新しい環境で生活を再建し始めた時は、うつ病の危険もある。子供たちもまた、困難な変化に適応しようとしている。いまこそ女性が力を発揮できるとき。個人的なコネクションを使うことや、個人の声を大きな計画に繋げる能力を持っている」と下山さんは言う。

女性グループの手助けによって、女性被災者は、堂々と自分たちの意見を主張できるようになる。人々のニーズを集める調査にも参加し、新しい生活手段を切り開いていく。いまこそ、女性の力が求められている、と下山さんは語る。

- ・ 面談日話すことはもうつらなり無事案ずるは被災地の姉
- ・ 被災者の生きづらさとのわれの生きづらさつながりの系かたく縫い閉じ
- ・ 人として生き抜くことの難しさを問い直す震災
- ・ ほどかれし土地の絆を縫い閉じてつながりゆく人たちの思い
- ・ 被災者の傷に手のひら当てながら遠く離れても感じる痛み
- ・ 被災者の声を聴き取る大切さ語られぬ声の問いかける飢えを

山田育男

森本幸彦

自分を見つめる

短歌で癒されよう

NPO法人 女性の安全と健康のための支援教育センター シンポジウム「災害と女性～未来(あした)をつくる」のお知らせ  
2011年9月18日(日) 午後1時半～4時半 東京ウィメンズプラザホール 参加費・会員 1,000円 会員外・2,000円  
※このシンポジウムは、韓国挺身隊問題対策協議会(日本軍の慰安婦問題を解決するために結成)からおくられた被災支援金によって開催されます。

シンポジスト ●福島裕子さん ●宗片恵美子さん ●中島明子さん  
主催:NPO法人 女性の安全と健康のための支援教育センター 協賛:東日本大震災女性支援ネットワーク  
お申し込み詳細は右記ホームページまで <http://shienkyo.com/>